

平成28年度

中学入試（1回）

国語試験問

注意事項

試験開始のチャイムが鳴るまで勝手にあけてはいけません。

1. チャイムが鳴ったら、ページ数(15ページあります)を確認しなさい。
2. どの問題からやってもかまいません。
3. 解答はすべて別紙の解答らんに書きなさい。

号 室		番 号		氏 名	
--------	--	--------	--	--------	--

一 次の①～⑤の□に当てはまる言葉を語群から選び、漢字で答えなさい。

- ①動物を保□する。
②神が天地を□造した。
③計画に支□をきたす。
④徒□を組む。
⑤要□よくまとめる。

《語群》

ショウ ゴ リョウ トウ ソウ

二 次の①～⑤の□に当てはまる漢字一字を自分で考えて答えなさい。

- ①晴れたので、ベランダでふとんを□す。
②犬も歩けば□に当たる。
③薬が□いて、頭痛がおさまってきた。
④ぶ□い本を読み終える。
⑤目を□じて、ねむりにつく。

三 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

サクラのツボミは、花咲く前の年の夏にできます。そこで、「なぜ、夏にできたツボミが、秋に咲かず、翌年の春に咲くのだろう」との疑問が浮かびます。これに対し、「秋は寒いが、春は暖かいから」と考える人がいるかもしれません。

しかし、「秋は寒い」という印象があるのは、その前の季節である夏が暑いために、それに続く秋は寒く感じるのです。春が暖かいと感じるのは、その前の季節である冬が寒いからです。実際には、春と秋の温度はほとんど同じです。

①ですから、暖かい温度のために春に花が咲くのなら、夏にできたツボミが秋に花咲いてもおかしくありません。そのため、夏にできたツボミが秋に咲かないのは、「秋は寒いから」という理由ではありません。

「もし秋にサクラの花が咲けば、どうなるか」と考えてください。夏にできたツボミがそのまま成長して秋に花咲いたとしたら、やがてやってくる冬の寒さのために、タネはつくられません。とすると、子孫が残りません。

もしそうなら、種族は滅びます。せっかくなつくられたツボミが開花したのに子孫を残せないという結果に終わることがないように、サクラの木は秋に花を咲かせません。ツボミを「越冬芽」という、硬い芽の中に包み込みます。

越冬芽は、冬の寒さに耐えるためにつくられる芽です。ツボミは、越冬芽の中に包み込まれて、冬の寒さに耐え、春を待つのです。ですから、秋に花が咲かないためのしくみは「秋に、ツボミは越冬芽の中に包み込まれてしまうため」ということになります。

サクラの場合、秋に越冬芽をつくって花を咲かせないのは、「秋に咲くと、やがてやってくる冬の寒さのために、タネはつくられず子孫が残らず、種族が滅びてしまうから」と意義づけられました。

しかし、秋に、花を咲かせる植物があります。代表的なのは、キクやコスモスです。すると、「なぜ、キクやコスモスは秋に花を咲かせるのに、種族は滅んでいないのか」との疑問が生まれます。

たしかに、キクやコスモスなどは、夏から初秋にかけて、ツボミをつくり、秋に花を咲かせます。しかし、キクやコスモスなどは、花を咲かせてタネをつくるまでの期間が短いのです。そのため、秋に花を咲かせても、冬の寒さがくるまでに、タネをつくり終え、子孫を残すことができるのです。

一方、サクラが花を咲かせてタネをつくるのには、月日がかかります。秋に花を咲かせては、冬の寒さがくるまでにタネをつくり終えられせん。タネができなければ、種族は滅びてしまいます。だから、秋に花を咲かせないしくみを備えているのです。

秋に花が咲かないためのしくみは、とりあえず、「秋に、ツボミは越冬芽の中に包み込まれてしまうため」と紹介しました。しかし、これはあくまで「とりあえず」です。なぜなら、すぐに二つの疑問が続くからです。

一つ目は、「秋に冬の寒さに耐える越冬芽をつくるというのなら、どうしてサクラは、秋の間に、もうすぐ寒い冬がくることを知っているのか」という疑問です。二つ目の疑問は、「どのようなしくみで、越冬芽はつくられるのか」というものです。この二つの疑問をまとめて、次の項で考えていきましょう。

サクラは、夏にツボミをつくりまします。しかし、秋に花を咲かせないために、越冬芽をつくり、その中にツボミを包み込みまします。もし秋に花を咲かせると、冬の寒さがくるまでに子孫(タネ)をつくり終えられないためです。

ほんとうにそうなら、サクラは、秋の間に、「冬がもうすぐやってくる」ということを知っていることになります。「ほんとうに、秋の間に、サクラは冬が訪れることを知っているのか」という疑問が浮かびまします。

越冬芽は冬の寒さをしのぐためのものですから、冬の寒さが訪れる前につくられねばなりません。気温が低くなり、寒くなってから急いで越冬芽をつくることのできるほど、サクラの反応は鋭敏ではありません。

そのため、サクラは、冬の寒さが訪れることを寒くなる前に知る能力をもっていなければなりません。「ほんとうに、秋の間に、サクラ

は冬が訪れることを知っているのか」という疑問に対する答えは、「知っている」です。では、どのようにして、^②サクラは冬の寒さが訪れることを、寒くなる前の秋に知ることができるのでしょうか。

その答えは、「葉っぱが、夜の長さをはかるから」です。夜の長さは、夏から秋にだんだん長くなり、かなり大きく変化します。このことは、夕方七時ころでもまだ明るい夏に比べ、五時ころには暗くなる秋を思い浮かべると、理解できます。

でも、ほんとうに、葉っぱが夜の長さをはかれば、冬の寒さの訪れを前もって知ることができるのでしょうか。この疑問に対する答えは、「できる」です。夜の長さは、六月下旬の夏至の日を過ぎて、だんだんと長くなりはじめまします。そして、夜の長さがもつとも冬らしく長くなるのは冬至の日です。この日は、一二月の下旬です。

それに対し、冬の寒さがもつともきびしいのは二月ころです。夜の長さの変化は、冬の寒さの訪れより、約二カ月先行しているのです。ですから、葉っぱが夜の長さをはかっているれば、冬の寒さの訪れを約二カ月先取りして知ることができるのです。

だんだんと長くなる夜を感じるのには「葉っぱ」です。ところが、越冬芽がつくられるのは「芽」です。とすれば、「葉っぱ」が長くなる夜を感じて、^③「冬の訪れを予知した」という知らせは、「芽」に送られねばなりません。「どのようにして、葉っぱから芽に、その知らせは送られるのか」という疑問が浮かびまします。

植物は、動物の神経のような刺激の伝達手段をもっていません。そこで、夜の長さに応じて、葉っぱが「アブシシン酸」という物質をつくり、芽に送ります。芽にその物質の量が増えると、ツボミを包み込んだ越冬芽ができるのです。こうして、夏にできたツボミは、越冬芽に包み込まれて、春を待ちまします。

「葉っぱから芽に、アブシシン酸は、どこを通過して送られるのか」という疑問があるかもしれません。葉っぱは光を受けて光合成という反応をしています。それでつくられてくる物質は、芽の成長に使われます。そのために、葉っぱから芽にそれを送るための通路があります。「師管」とよばれます。葉でつくられたアブシシン酸は、この師管を通過して、芽に送られると考えられます。

このようなきちんとしたしくみで越冬芽ができ、ツボミが包み込まれるのですから、秋に花が咲くことはないのです。

(田中修 おさむ 『植物はすごい 七不思議篇』より。)

問一——線部①〈暖かい温度のために春に花が咲くのなら、夏にできたツボミが秋に花咲いてもおかしくありません〉とありますがなぜですか。その理由を15字以上25字以内で説明しなさい。

問二——線部②へサクラは冬の寒さが訪れることを、寒くなる前の秋に知るゝとありますが、そのために行われているのはどのようなことですか。それを15字以上25字以内で説明しなさい。

問三——線部③「冬の訪れを予知した」という知らせとありますが、その知らせを受けた「サクラ」が「越冬芽」をつくるために行っているのはどのようなことですか。それを25字以上35字以内で説明しなさい。

問四　　〰線部へなぜ、夏にできたツボミが、秋に咲かず、翌年の春に咲くのだろうとありますが、〈サクラン〉の花が〈春に咲く〉のはなぜですか。その理由を50字以上70字以内で説明しなさい。

[illegible]

- 5 -

四 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

今ではもう、だいぶ昔のこと。みごとな金色のたてがみを持つライオンがいた。風にふかれて丘^{おか}の上から顔を出す時、まるで太陽のぼり来るようだと、街の者たちはうわさした。

ほこらしげに胸をはるライオン。

「金のたてがみで生まれた私こそ、天に選ばれし者なのだ」

ライオンはたいへんお金持ちだったので、知り合いを集めては盛大なパーティを開き、たてがみを見せびらかした。

——ああ、実気分が良い。私の美しさにかなう者などいない。他^{ほか}の動物たちは、茶色や灰色ばかり。なんと地味なことか。——
やがて、ライオンは、たてがみと同じ金色の服に身を包み、身体じゅうを輝^{かがや}かせて街を歩くようになった。

この国の王様はたいそう年老いていた。ある日、自分の死が近いことを悟^{さと}ると、次の王様を国民で決めるようにとおふれを出した。

ライオンはすぐに思った。

「私こそが、王になる資格を持っている」

だが、そのころ街の広場では、別のライオンが候補に上がっていた。

「ねえ、知っている？ 街外れにとつても心のやさしいライオンが住んでいるみたいよ」

「ええ？ 本当？」

「やさしいだけじゃなくて、すごく強いらしいの」

「そのライオンの話、どこかで聞いたことがあるわ」

「まさに次の王様にぴったりじゃない」

梢^{こすえ}の中でも鳥たちがささやき合っている。

「そうだよね、あのお方こそふさわしい」

金のライオンは^①このうわさ話が気になって仕方ない。すぐにでもたしかめずにはいられなくなって、さつそく街外れまで出かけて行つた。

楽しそうな笑い声が風に乗って流れてくる。木立のかげからそつと様子をうかがうと、フクロウおばさんの家を修理しているライオンを見つけた。

「あれがうわさのライオンか!? なんだ、あのうすよごれたモップのようなたてがみは！」

土にまみれ、ほこりをかぶって作業するライオン。

折から降り出した雨などものともせずに、せっせと働き続けている。

通り雨が去って、森にふたたび光がさしこんできた。雨に洗われたライオンのたてがみが輝いている。フクロウおばさんは、ほうほうと微笑^{ほほえ}んだ。

「まあなんて美しい銀のたてがみだこと。見ちがえちゃったわ」

銀のライオンは片時も休もうとはしない。病気がちな仲間に食べ物を分けてやったかと思えば、お年寄りの肩^{かた}をもんでやり、木の下に落ちた小鳥のヒナを巣にもどしてやる。

「ありがとうね、おかげで助かったよ」

「やあ、いつもすまないねえ」

うれしそうな声が木々の間をこだまする。

「こんなライオンがいたなんて」

金のライオンは、菌ぎしりしてくやしがつた。放っておけば、銀のライオンが次の王様に選ばれてしまうのでは、そう思うと気が気ではない。

「王にふさわしいのは、この私だというのに。何とかしなければ……」

ある日、街の広場で金のライオンは、おおげさに頬をおさえながら聞こえよがしに言った。

「ああ、痛いよ。痛くてたまらない」

「どうかしたのかい？」

通りかかったヒョウがたずねると、

「人は見かけによらないっていうけど、本当だなあ。まさかあのやさしい銀のライオンがねえ……。すれちがいざまに、ちょっと肩がぶつかっただけなのに、いきなりなぐられたよ」

さも痛そうにしかめつ面をした。本当は、銀のライオンを偵察した帰り道で、うっかり木に顔をぶつけてしまったのだ。

「えっ？ あのおとなしいライオンにかぎってそんな乱暴なことをするはずがないよ」

金のライオンは、渋い顔のまま続けた。

「信じられないかもしれないけど、意外と暴れ者だったりしてさ。クマと取っ組み合っているのを見たっていう話も聞いたしね……」

実のところは、崖道から足をすべらせて谷に落ちそうになっていたクマを、銀のライオンが助けてやったのである。

しかし金のライオンにとって、白を黒にぬりかえるなど、たやすいことだった。

来る日も来る日も、金のライオンは悪いうわさを広めて歩いた。

「おなかをすかせた仲間から食べ物を取り上げるところを、見た者がいるらしい。気をつけて下さい」

「なんですって？ そいつは初耳ですねえ」

「かなり気性が荒いとか。でも最初はいい顔をして相手をすっかり信用させてしまうつていう話です。用心して下さい」

「そんな話、聞いたことないけどなあ……」

金のライオンが何を言っても、誰も信じようとはしない。

それなのに、どうしたとか、ぼつりぼつりと話題に上り、静かにうわさされ始め、やがてじわじわ広まった。

「あの街外れに住むやさしい銀のライオンが、仲間をなぐって食べ物を奪ったつて聞いたけど、そんなこと、あるわけないよね」

「銀のライオンが実は乱暴だつて話も出ているの？」

「なんでも、投げ飛ばされた相手がケガして入院したとかしないとか……」

「そういえばこの間、森の広場に救急車が止まっていたよ。もしかすると、あれがそうだったのかなあ」

「ねえねえ、聞いた？ 昨日は、あの暴れ者のトラとなぐり合っていたらしいわよ」

「うそでしょ？」

「しかもいきなり飛びかかっていったみたい」

「え、ほんと!？」

「僕も銀のライオンがトラに襲いかかるのを見たつて聞いたよ」

「私も友達から聞いたわ。はでにもみ合っていたつて」

「君も聞いたのかい、そのこと」

おかしなものである。周りが同じうわさを知っているだけで、銀のライオンをうたがう者があらわれ始めた。

「まさかつて思っていたけどさ、乱暴者だつていうのは、ひょっとすると本当かもしれないね」

「たしかにね、みんなそう言っているし……。火のないところに煙は立たないつていうからね」

「近寄らないほうがいいかも」

「関わらないほうがよさそうだ」

ちようどそのころ、金のライオンが書いたメールがシカに届き、すぐにリスに転送されていた。

「シカくん、銀のライオンには気をつけて下さいね」

「リスくん、銀のライオンに用心してね」

メールは丘を越え、森を越え、渡り鳥のむれを越え、またたく間に広がった。遠くの島に住むペンギンまでもが、怖がるようになった。転がる雪玉のようないきおいで、うわさはたちまち膨れ上がった。そしてうわさは、いつの間にか尾ひれをつけて、一人歩きし始めたのである。

今では、銀のライオンがフクロウの家をたたきこわしたという嘘が、「本当のこと」として知れ渡っている。

小鳥のヒナを巣から落として握りつぶそうとしたという偽りが、「真実」としてまかり通っている。

街の広場は、銀のライオンの悪い②うわさでもちきりである。

「ちよつと待って下さいよ、皆さん！」

フクロウおばさんがさげんだ。

「銀のライオンは、それはそれは親切でりっぱな方です。台風でこわれた私の家を泥まみれになって直してくれたんです」

「そうだとも！」

小鳥もさげんだ。

「ヒナだった僕が巣から落つこちた時だって、汗びつしよりになって巣に戻してくれたんだ。悪い評判なんて、何かのまちがいさ」

「そう言っているのはあんたたちだけだ」

「街中のみんなが知っているのに、何もないとはとても思えない」

「我々だって、ついこの間までは、やさしいライオンだと信じこんでいたんだがねえ」

根も葉もないうわさの広がりに銀のライオンは、ただ苦笑いしただけで何も言わなかった。誤解はいつか必ずとけると思っていたからだ。

一部始終を見ていたのは、空にうかぶ真つ白い雲だけ。

「嘘は、向こうから巧妙にやってくるが、真実は、自らさがし求めなければ見つけれない」

雲は泣き流れていった。しかし、その声は誰にも届かなかった。

黄金の稲穂の輝きが地平線をおおうころ、新しい王様が誕生した。③自ら手を挙げた金のライオンが、仲間におすすめされた銀のライオンをおさえたのだ。

「金のたてがみを持つこの私にふさわしい金の城を建てよ！」

「まわりを金の城壁で囲め！」

「正門には、世界一大きな金のライオン像を！」

「城のすみからすみまで金を敷きつめ、金で埋めつくせ！」

「私にかかわるすべてを黄金に輝かせよ！」

新しい王様は好き勝手に国を治めた。世界中から黄金を買い集め、たくさんの借金をかかえこんだ。庶民の貧しさになど目もくれず、自分だけは贅沢三昧。

「私の金のたてがみこそが世界一。この世にある黄金は全て私のものだ。他の国には砂金ひとつぶたりとも持たせるな」

そのうち、よその国が金の塔を建てたと聞くと、生意気だと戦いまで始めてしまった。田畑が焼かれると、少ない農作物をひとりじめ。

民衆は、仕事も家も土地も、生きる希望もなくした。

国はたちまち、荒れ果ててしまった。

焼け焦げて煙る大地を前に、皆ぼうぜんとして立ちつくした。

「ああ、なんということだ」

「何もかも失ってしまった。もうおしまいだ」

「なんてひどい王様だろう」

「もし銀のライオンが王様だったら、こんなことにはならなかったのよ」

「そうさ、彼こそがふさわしかったのに」

「僕はただ、銀のライオンに気をつけてって聞いたから、仲間に教えたただだよ」

「私だって、なんとなく心配だったから、家族に知らせただけだわ」

「おいらだってちょっと気になって、メールを転送しただけさ」

金のライオンの他には悪意のある者など誰一人としていなかった。

あの時、うわさを広めてしまった者たち——森ではシカやリスが、島ではペンギンが、空ではヒバリが、われた石畳の上ではウサギが、

こわれたベンチの陽だまりではネコが、止まった噴水のかたわらではキツネが、くずれた屋根のてっぺんではハトが——、国じゅうで誰もが同じようにながらっていた。

「どうしてこの国は、こんなことになってしまったんだろう」

野原のすみで、野ネズミが静かに口を開いた。

「僕は聞いた話を、友達に教えてあげただけなんだよな。でも、自分の目で何か一つでもたしかめたっけ……？」

丘の向こうから時折、ゆらめく炎が上がる。

④「ほんとに、金のライオンだけが悪かったのか……？」

はるか頭上を過ぎ行く雲は、今日も眩く。

「誰かにとつて都合のよい嘘が世界を変えてしまうことさえある。だからこそ、なんどでもたしかめよう。あの高くそびえる山は、本当に山なのか。この川は、まちがった方向へ流れていないか。皆が歩いて行く道の果てには、何が待っているのか」

雲の切れ間から、澄んだ光が地上を照らした。

しかし荒れ果てた大地には、もう誰の姿もなかった。

(林木林『二番目の悪者』より。作問の都合上、一部表現を改めています。)

問一——線部①「このうわさ話」とは、どのようなものですか。それを25字以内で説明しなさい。

問二——線部②「悪いうわさ」とは、どのようなものですか。それを20字以内で説明しなさい。

平成二十八年
度
中
学
入
試

2

受 験 番 号



(processes)
 (parameters)

[illegible]

問

[illegible]

問

[illegible]

問二

[illegible]

問四

[illegible]

問

[illegible]

問

20

問

[illegible]

問四

[illegible]

室 号

受験番号

氏 名

受験番号は解答用紙の右のらんにも記入しなさい。